

進化を続ける「大人の洋裁教室」と洋裁マダムたちの歩み

KIITOの大人の洋裁教室は、2015年の「LIFE IS CREATIVE展 高齢社会における、人生のつくり方。」から始まりました。〈わくわくする高齢社会〉をコンセプトとした本展でさまざまなリサーチを行う中、自分磨きとしての“おしゃれ”にたどり着き、着られなくなった服をリメイクするワークショップとファッションショーを開催。2016年から、ユニバーサルデザインを専門とする見寺貞子さんを講師に迎え「大人の洋裁教室」がスタート。着物生地をリメイクしワンピースやシャツを仕立て、洋裁技術に磨きを重ねていきました。これまでの参加者たちは約70人にもおよび、「洋裁マダム」としてKIITO内のいくつかの企画にも関わっています。2023年には、洋裁マダムが講師となり、小学生の子どもたちを対象に、洋裁マダムと着物生地をリメイクしてブラウスやワンピースなどをつくる「こどもの洋裁教室」を開催。お披露目となるファッションショーでは、自作のオリジナルの洋服を身にまとい、洋裁マダムと子どもたちがいっしょに堂々と舞台を歩きました。

2023年「こどもの洋裁教室」と「着物リメイクファッションショー」の様子
写真：水本光

大人の洋裁教室の歩み

- 2015
- 「LIFE IS CREATIVE展」開催
- 2016
- 「大人の洋裁教室」開催
- 2017
- 「大人の洋裁教室2」開催
- 2018
- 大人の洋裁教室チームとして「オープンKIITO2018」に初出店
- 「ちびっこうべ2018」内の洋裁工房、関連プログラムで子どもたちをサポート
- 2019
- 「オープンKIITO2019」で大人の洋裁教室SHOPを出店
- 「大人の洋裁教室3」開催
- 「LIFE IS CREATIVE展 2019」にてこれまでの活動を紹介。講師の見寺貞子氏がトークイベントに登壇
- 2021
- 2023年の「神戸ファッション都市宣言」50周年に向けて「ダイバーシティファッションショー〈仮〉」計画がスタート
- 2022
- 子ども向けワークショップ「洋裁マダムとマスクをつくろう!」開催
- 「ダイバーシティファッションショー」に向けて洋裁スキルをアップする毎月の講座を開講
- 2023
- 「こどもの洋裁教室」開催
- 「こどもの洋裁教室 着物リメイクファッションショー」開催

神戸ぐらしはじめました。

19人目
稲垣智子さん
(美術家)
神戸歴：3カ月(取材時点)

英国で美術を学び、映像インスタレーションやパフォーマンス作品を発表している稲垣さん。コロナ禍に自然の多い場所を求めて塩屋に引っ越すも、神戸・岡本にオープンした「OAG Art Center Kobe」運営のためにすぐに岡本へ。新生活がスタートしたばかりの岡本の家にお伺いしました。

「Y」 滝沢陽菜さんの神戸めし

コム・シノワの「クロワッサン サク」
「クロワッサン モンスティル」



ビルの半地下にあるパン屋さんは香ばしい香りだけでなく、愛知に住んでいた滝沢さんが、はじめて神戸で食べたパンがこのクロワッサン。「神戸のパンってこんなに美味しいんだ!」と感動したそう。折り込みの層数異なる2種類のクロワッサンを食べながら、「サクは香ばしくて、モンスティルは砂糖がジュワツとひろがって…」と食レポ披露。普段の昼はお弁当をつくらしているそうで、「パンは贅沢をしたい気分のあるときに食べるんです」と教えてくれた。

ブランジェリー コム・シノワ&オネストカフェ
神戸市中央区御幸通7-1-15 三宮ビル南館地下

19. 滝沢陽菜さん
(デザインヒーロー)
デザイナーとしてKIITOクリエイティブプラボに入居。学生時代にはKIITOでインターンをしていた。



神戸への移住、最近増えているそうです。神戸に越して間もないあの人に、気になる質問をぶつけてみました。



Q. 神戸での2拠点目の生活、いかがですか？

大阪に住んでいた時は近くに自然がなかったので、アトリエも兼ねて自然のある環境を探して拠点を神戸に移しました。たまたま、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会が所有する、今は使われていない文化施設が岡本にあると友人に聞き、見学をさせてもらったんですけど、建物も空間もすっかり気に入ってしまって、ぜひ活用させてほしいと協会に企画書を持って行ったんです。1年以上の準備を経て、アーティストの友人たちにも協力をしてもらえることになって、2023

年秋にオープンしました。まだリノベーション途中なのですが、音楽ホールや滞在スペースもあるので、展覧会やコンサートなどいろいろ企画ができたらと考えています。塩屋では、環境がそうさせるのかとても絵を描きたくて描いていました。センターでは絵画教室もしますし、庭に自然農法をしている方に畝を作ってもらって、夏から畑も始めました。施設は住宅地の中にあるのですが裏が山なので、いのししの攻防が続いています(笑)。

5問でわかる世界のデザイン都市ガイド

デザイン都市って何？世界の「デザイン都市」担当者に共通の質問を投げかけて解きほぐします。第26回はミャンマーとラオスとの国境に接するタイ北部のチェンライから。2023年の新規加盟都市です。

Q1「ここぞデザイン都市!」というスポット/Q2チェンライのまちを舞台にした作品のおススメ/Q3 最近、一番驚いたこと/Q4 ハマっていること/Q5 デザインをひと言でいえば

Vol.26 タイ・チェンライ | Chiang Rai

- 黄金に輝くランナー様式のチェンライ時計塔です。ドイ・トゥン開発プロジェクトとその商品、チェンライ・アーティスト・レジデンスもならではの取り組み。
- 『THE CAVE サッカー少年救出までの18日間』。2018年、チェンライのタムルアン洞窟で遭難した地元サッカーチームの少年たちが奇跡的に助け出され、全世界でニュースになった救出劇の映画化。
- 「タイランド・ビエンナーレ チェンライ 2023」でのチェンライの変化です。アートが人々をつなぎ、人々の感覚や生活を豊かにしていく様子に驚きました。
- 国際紛争、環境問題、PM2.5など、課題解決のプロセスにデザインを活用すること。
- デザイン＝人生経験

📍 答えてくれた人
Promporn Jindawong Nateharnさん

経営コンサルタントとして20年以上の経験を持ち、官民問わず様々な組織の立ち上げと役職を兼任。チェンライの多くの組織とパートナーシップを結ぶ社会的企業であるチェンライ市開発会社(CRCD)の創設者でもある。



KIITO NEWSLETTER VOL.039

2024年2月発行

「KIITO NEWSLETTER」は、デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)が年4回発行する情報誌です。センターのコンセプトである「クリエイティブな活動を発信していきます」。

発行：デザイン・クリエイティブセンター神戸
編集：竹内厚、KIITO出版部
デザイン：ニコール・シュミット(hsdesign)

KII+O:

ACCESS
阪急・阪神神戸三宮駅・JR三ノ宮駅よりフラワーロードを南へ徒歩20分
国道2号線を越えた神戸税関東向かい神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分
運節バス「Port Loop」KIITO前下車すぐ

CONTACT
デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)
〒651-0082 兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4
TEL: 078-325-2235
E-mail: info@kiiito.jp
開館時間: 9:00-21:00
休館日: 月曜日(祝日、振替休日の場合はその翌日) 年末年始12/29-1/3
https://kiiito.jp/



KII+O: 039

KIITO NEWSLETTER



【特集】
KIITOとファッション
つくるをめぐる
【対談】見寺貞子×津川恵理

【連載企画】神戸ぐらしはじめました。
〇〇さんの神戸めし：滝沢陽菜さん
世界のデザイン都市ガイド [チェンライ]

「特集」KIITOとファッション つくるをめぐる

「対談」 見寺貞子×津川恵理

「大人の洋裁教室」講師 建築家

「大人の洋裁教室」で洋裁マダムたちと活動が続けてきた見寺貞子さんと、サンキタ広場のデザインで三宮駅前の印象をがらっと変えた建築家の津川恵理さん。ファッションと建築という異なる分野ながら、ふたりの間にはいくつかの共通の問題意識がありました。初対面となったふたりによる「つくるをめぐる」対談をお届けします。

ファッション×建築、 それぞれに通じる 感覚

—建築家である津川さんにとってファッションはどういったものでしょう。

津川：私が学生時代最後の修士設計として、分析対象にしたのがイッセイミヤケの「MADAME-T（マダムティ）」[*1]でした。伸縮性のあるブリーツ加工の生地小さなスリットが入っているだけで、多様な着かたができるというもので、これは、私が大事にしている建築思想にも通じることなんです。要するに、物自体は何も変わらないけど、それがいち個人に手渡されると現象や事象としてさまざまに展開するように設計されている。私が設計した阪急神戸三宮の駅前広場[*2]にも通じることですけど、大きなオブジェク的なものをつくるとしても、いかに個人の身体に接続して多様な振る舞いや過ごし方を引き出していけるかということを常に考えていて、これって身体が構造となって完成するファッションにも通じるところがあるなと考えています。

見寺：私は大学ではファッションデザイン学科で教えていますけど、「環境」という言葉で考えることがあるんです。一般には人間を大きく取り巻くような建物や空間が環境だとされていますが、肌に触れるレベルの身近さで人を取り巻く衣服、ファッションもまた環境だと言い換えることができると考えています。いずれもその中心にあるのは人間の生活や感覚なんですね。建築の話になると、その感覚が薄い方もおられるので…いまの津川さんのお話を聞いて本当にうれしいですね。

津川：実は、私は「空間」という言葉は使わないというこだわりがあるんです。原稿の校正指示があっても直さない(笑)。その代わりに使うのが「環境」で。環境という言葉を使うためには、その場がどういう状態で、何が起きているのかまで説明しないといけないけど、空間というのはその責任を負わずに使えてしまう、魔法の言葉のようなところがあって。その環境という言葉を、衣服に置き換えることもできるという見寺さんのお話にも共感します。

見寺：ありがとうございます。私はユニバーサルファッションのことを研究しています。その代表的なデザイナーといえば、やっぱりイッセイミヤケ。ユニバーサルというのは均一性として捉えられることもありますが、人にはすごく多様性があって、それぞれがいかに快適に過ごせるかという話なんだと私は理解しています。そう考えたときに、津川さんの設計された三宮の広場には円形のなかにいろんな形、いろんな高さがあって、そこで立っている人もいれば座っている人もいて、私は専門家ではないですけど、表情豊かな場になって思っていました。実際にここでも待ち合わせをしていても飽きないんです(笑)。

津川：それは嬉しいです。あの駅前広場は、100人いれば100通りの快適性があがり出されるように、といってデザインが快適性を与えるのでもなく、野放しでもない、そのぎりぎりのラインを模索する感じで設計しました。そういう意味で、イッセイミヤケの哲学に通じるなと思っていて。そもそも駅前広場というのは雨水を排水するために床が曲面に

なるので、その上に三次元的な造形をつくるにはミリ単位の調整が必要で。衣服のデザインプロセスはわかりませんが、もしかしらそういう点でもかなり近いところがあるのかなと思います。

「大人の洋裁教室」 とコミュニティを 横断する場の意義

—「大人の洋裁教室」を見寺さんにとってどういう意識で始められましたか。

見寺：大学では学生たちと話をする機会が多くて、ファッションといえばトレンドやクリエイティブといった話になりますし、それは私も大好きですけども、やっぱりこれからの時代がどうあるべきなのかということを伝えたいと思っていました。そこで、ファッションの枠組みから取り残されがちな高齢者を快適に、元気にするにはどうしたらいいかってことをまず考えました。高齢化社会にあって、高齢者がいつまでも元気に社会に参画することで経済面で介護医療の負担だって軽減します。そのために高齢者の専門性を活かして着物のリメイクや自分の洋服をつくるというところから、この「大人の洋裁教室」を始めたわけです。

津川：ファッションから結果的に社会にどういう意味があるのかという先のことで考えながらプロジェクトを立ち上げられるという話は、建築家にも近いのかもしれないと感じました。設計士と建築家の違いとしてよく語られることとして、設計士は依頼された建物を建築基準法などに則って設計する資格を持った人なのに対して、建築家は社会的な思想を持ちながら建築という手段を用いて何をするのかってことに尽きるので。本来は求められないことかもしれませんが、そこまで領域を拡張して可能性を考えながらやるのが大事なんだって私はそういう信念を持ってやっています。

見寺：わかります。コロナ禍を経て、私はファッション業界のことがあらためて好きになったんです。コレクションショーなども開けなくなって落ち込んでしまつところ、世界中のファッションデザイナーがいろんなことを考えて、さまざまな形で発信を続けていった。ファッションというのは、その時代の心理や生活に近いところで発信していける分野だし、服を信じていいんだとあらためて感じました。「大人の洋裁教室」の参加者もまずは自分の技術を高めたいという方がほとんど。ご自身の洋裁技術を社会に還元したり、人に教えたりということに自信がないというので、これにも徐々に慣れてもらって、ようやく今年（2023年）、「こどもの洋裁教室」という「大人の洋裁教室」参加者の洋裁マダムと小学生がマンツーマンに組んで、最後はファッションショーまでやりきるということができました。高齢者ご自身ではこれまでの機会をつくることはできないので、KIITOのような施設でそういう場を生み出していくことにも意味があるなと思っています。

津川：私の場合は、東京の渋谷PARCOで「GAKU」という10代に向けたクリエイティブクラスで建築／都市の授業を受け持っています。中高校生でも主体性がある意識の高い子が多く参加してますけど、実際には大学生も参加を希望して入ってきます。そうやって異なる世代が交ざりあうことで、自分の所属するコミュニティとは違う立ち位置が求められたりして、日常生活では経験できないような場になっています。若いうちから自分の小さなコミュニティだけに閉じない場を体験したことがあるかどうか、これが主体性を育む上では大きな違いになるんだろうなって感じています。

見寺：ですね。能力ってというのは年齢も性別も関係ないですから。私のプロジェクトでも大学生が混じりますので、いろんな面白いことが起きて、私にとっても学びがたくさんあるんです。もうひとつ私が大事なと思うのは、何事も持続して考えること、周りの人も巻き込んでどう思う？って一緒に考えられる人を増やしていくこと。津川さんのやるGAKUのクラスもそうでしょうけど、そういうことを

続けていくことでいまの社会も変わっていくんじゃないかなって思います。

津川：そうですね。私は政治家になるわけでもないですけど、社会がこうなっていけばということを建築という形でひたすら投げ続けるしかないなと思っています。

他者との 関わりがあってこそ さらに広がっていく

—「大人の洋裁教室」では自分のためにつくること、他人に教えること、その両方に取り組んできました。

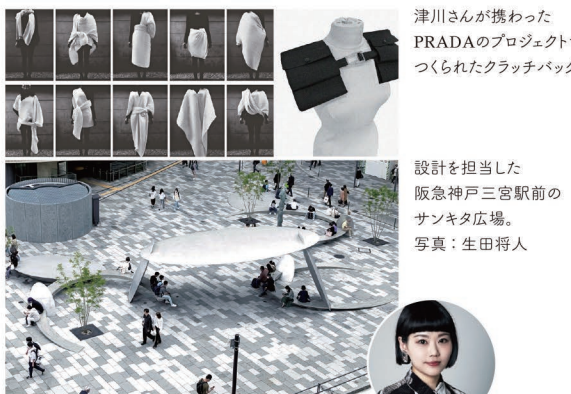
見寺：まずは自分のためにつくるのがとても大切だと思います。好きだからつくる、それによって技術が向上していく…ですけど、自分が好きなものをつくるだけでは限界もあるんです。誰かに教えたり、人のものをつくることでより技術が高められますし、自分の幅を広げることもなるんですね。しかも、人に教えるというのは社会貢献ですから。高齢者にとってはやり甲斐ということにもつながるだろうと思います。

津川：私は公共空間の設計に関わることも多くて、そこでは型となるような居過ごし方にはめこまないようにすることを心がけています。そうすると、みんながばらばらな状況で過ごすことになって、結果的に周りにいる他者のことをできるだけ想像したり、他者へのケアの思想を育んだりってことが必要になります。ひとつの定型＝マジョリティをつくってしまうと、それが“みんなこうなんだから”という決めつけにもつながって、思いやりの精神が欠けていってしまう。私自身、自分ひとりで完結するものにはあまり興味が持てなくて、施工者や職人といった技術のある方々の知恵を借りながら、ひとつのものをつくっていきたいんです。そのためにも、自分の技術の弱さを認められるデザインをするっていうのは、結構意識しているところで。

見寺：その考えはすばらしいですね。ファッションデザイナーというのも、ボタンナーなどのいろんな立場の人と組んで進めるものですし、私自身、クリエイターでもなければ技術も少ししかありません。だからこそ、パターンのできる人や知識や技術のある人と組みますし、意識的に高齢者や障害のある方と一緒に仕事をするんです。そうすると個性が高くなるのでやっぱり難しいんですけど、だからこそ技術も考える力も上がっていくのだと考えています。デザインの話ってどうしても個人に焦点が当たがちですけど、決してそれだけじゃない。そういうことに興味のある人がもっともっと出てきたらなと思います。



見寺貞子
神戸芸術工科大学 芸術工学部 ファッションデザイン学科 教授 博士（芸術工学）。「ユニバーサルファッション」を研究テーマとして、社会福祉活動に参画しながらその教育、普及に務める。KIITOでは「大人の洋裁教室」「こどもの洋裁教室」で講師を担当。



津川恵理
1989年生まれ、神戸市灘区出身。2018年からニューヨークの建築事務所「ディラー・スコフィディオ・レンフロ」に在籍。三宮駅前の「さんきたアモール広場デザインコンペ」最優秀賞受賞をきっかけに日本に帰国して、2019年ALTEMYとして独立。建築デザインに留まらず活動中。



教室からプラットフォームへ

対談の中で、おふたりの目は確実に未来を見つめ、同時に優しくさを帯びているようにも感じた。今この場にいない誰かを想うこと。まだ見ぬ未来を思い描くこと。そのかたちに正解はないけれど、つくり手とそれを享受するひととが混ざりあう世の中では、いつだって共に考え、感じあう機会がめぐる。シニア世代から始まった「大人の洋裁教室」というコミュニティは、子どもを巻き込み、サポートする若い世代を巻き込み、いま、服を通じて誰もが語り合えるプラットフォームへと移り変わっていく道の途中にあるように感じる。みんなでこれからを考える一つのきっかけとして、洋裁マダムたちの歩みをこの先も見守っていきたい。

文：安藤友美（元 KIITO スタッフ）
*よく口出しをする孫”ポジションとして「大人の洋裁教室」の企画・運営に約5年間携わった。

KII+O: NEWS & TOPICS / 2024 Winter

What's on

スケボーづくりと金継ぎを体験できるチャンス！

KIITOでは2014年より、ものの価値やつくり手の想いを体感する場として「ものづくりワークショップ」を継続的に開催しています。今春のテーマは「スケートボード」と「金継ぎ」。スケボーは一枚板の削りだしから、金継ぎは漆と金を使って、とどちらも本格的。プロの技や知識、ものづくりの文化、歴史など、自分の手で辿りながら感じてみてください。

Bundy 小林さんと、スケートボードをつくる。

日時：2024年3月30日（土）
会場：KIITO 3F 303
講師：小林浩之（Bundy）
参加費：20,000 円（材料費含む）
定員：5 名（事前申し込み制）



ちまはが金継ぎ生田さんと、器を金継ぎする。

日時：2024年4月6日（土）～5月18日（土）※全5回
会場：KIITO 3F プロジェクトスペース 3B
講師：生田健介（ちまはが金継ぎ）
参加費：14,000 円（材料費含む）
定員：8 名（事前申し込み制）



News

KIITO 全館イベントを今年も開催！

KIITOに入居するデザイナーや建築家などの仕事場、クリエイティブラボを特別公開する「オープン KIITO」を今年も開催。ワークショップや館内を巡るツアーなど、さまざまなイベントもあわせて実施予定です。KIITOのことを知っている方も、はじめて KIITO に来られる方も楽しめるイベントが目白押し。ぜひ足を運んでみてください。

オープン KIITO 2024

日時：2024年3月2日（土）
11:00 ～ 16:00
会場：KIITO 館内各所
料金：無料
（ワークショップなど一部プログラムは有料）

Report

ケアの視点からまちづくりを考える時間に

ケアと暮らしの編集社の代表であり、医師でもある守本陽一さんをゲストにお迎えし、トークイベントを開催しました。「ケア」という視点からまちづくりについてお話を伺い、まちへの関わりしるをデザインする取り組みについて、KIITOで展開する「パンじい」などのシニアプロジェクトの事例も紹介しながら意見交換を行いました。それぞれが生き生きと地域で暮らしていける社会をデザインすることについて参加者ともに考える時間となりました。

第3回 地域課題解決＋クリエイティブトーク 「ケアするまちをデザインする」

日時：2023年12月15日（金）
会場：KIITO:300
ゲスト：守本陽一（一般社団法人
ケアと暮らしの編集社 代表理事）

